安藤子
よしこ子著

初音草

新詩集

金港堂蔵版

初音草

安永乙

安孫子美子女史著

詩集

初音草

完

金華堂藏版

名なし野の、名なし小草、名付けて初
音草と云ふ、十九の春を歌ひ出でし此
初音草、摘む人あらば願くは、花も實
も無きあはれを見給ひて、其柔胸にふ
れさせ給へ、
やがては花も咲きいでんゝし

美子しるす

目次

西行法師……一
濃紫……五
冬の夜……十三
夕雲……十五
薄命怨……二十五
男装……二十七
細腰乱舞……三十三
小草……三十五

古精舍……四十一
のゝしり……四十五
西郷南州の像の下にて……五十三
すゞろ……五十七
魔の池……六十七
秋の聲……七十一
若き鐘楼守……七十七
雨夜……八十一
千曲江頭に立ちて……八十九

染衣……九十三
秋風……九十九
はなぐし……百〇三
聖壇……百〇七
ゆめ……百〇九
あこがれ……百十三
ハルピンの露……百十九
うれひ……百二十三
はつ秋……百二十九

深林……百三十三
御名……百三十七
舞殿……百四十三
ろの人……百四十七
太平洋の春……百五十三
ちる花……（短編小説）……百五十七
街頭の小枯……百六十五
戰友……（短編小説）……百六十九
野の友……（短編小説）……百八十一

姉のおもゝろ……（短編小説）……百九十五
後半生……（短編小説）……二百〇一
辭鄕の賦……二百〇九
女詩人……（短編小説）……二百十三
女箱……（短編小説）……二百二十七
駒の蹄……（短編小説）……二百三十六

目次完

はつ音草

西行法師

寇するあらば兩つに裂いて
三尺無反の劍に血ぬらし
龍顏遠き階下に額づひて
過る長袖を睥睨する
身は是、北面の大丈夫。

美子

春宵甲を叩いて散る花一片
有聲無聲、すべて意味
嗟、大慈なる正覺の佛陀が
凋落の啓示胸に泌むを
奚ぞ我れ、生死の謎を解き得ざる。

可憐の寢顏に面を背けて
蕭々去る明滅の燈下
堪えじな小さき父呼ぶ聲！

双脚につと蹴つて廊に出づれば
風落寞として雲大寂。

六合の物象我に於て『空』なるを
胡ぞ發念の前にわが子あらむや
是より圓頂の一沙門
行雲流水に人生を笑つて
『死なん哉花の下にて願くは……』

（わがはくは花の下にて我れ死なん
その衣更月の望月のころ。）

西行法師

濃紫

失せし子が濃き紫の染小袖盆を七度寺院に
古りたる

何んとなく双の蝶を野に追ふて並みて笑み
しを罪とし云ふや

おん肩を小さき袂にそと打ちて姉様振に『春
雄』と呼ばむか

なんなれば我を石よと人の呼ぶよみがへら
ずも息吹のちから

櫻散る夕べを鐘に送り果てぬ行く雲百里友
やうなだれむ

醉ひ〳〵て小雨を唄に歸る人李白に似ると
影追ひて見ぬ

野の百合花に銀河二千里影絶へて夫れ天地
の戀誦さしむる

あはたゞしく九旬の夏を肩の痩せし春より
人と興なき世帶

緋牡丹に小雨けぶれる春の日を佗居の夢の
花にゆら〳〵

ひれ伏してみ脚に悔ひん罪の子か堂に高う
見る像聖ポーロ

花を歌に花の下ゆく君を繪に筆とらば如何
に白梅月夜

秋七度枯れては咲きぬ小百合ばな御墓めぐ
れる美しき扉や

何此まゝ朽ちむ運命の二人なるにあまりに
惜しき戀のほゝありよ

高う誦する若僧正が法華經にほろりゝぼれ
し御堂の紅蓮

神に得しと今か野を吹く草笛に舞はむ入興
の虫が白拍子

傘の中を亂れて重き君が息鬢に氷りて露し
たゝりぬ

詩に會せず畫堂に古りし御像やわびて仰ぐ
に露帶びし眉

匂ひ清ふ神大御衣雲に引きて天降り給ふか
野を白き虹霓

京の子が祇園へたどる春の夕繪日傘おゝめ
花散りかゝる

胸に抱くにさても冷たき夏花の又燃ゆと見
る我や狂ひの子

あゝの岸に生ひでし磯菜浪に投げて佐渡に
十九の人泣かしめむ
音もなく枕に落ちし鬢の小櫛あゝさびしら
を人の名呼びぬ
さびしみを巨塔の影にひそませてウオータ
ーローの秋の陽榮ゆる
口輕の翁客呼ぶ聲もおく酒屋の夕べ秋雨の
ふる

さびしうも壁にはふ日を床に見つゝ藁打つ
母の唄をぼへしよ
神が斧に削らせましゝ淵の岩水音寒く白藤
の散る
「忘れねば思ひ出さずと」薄う見る文に泣く
べき夜の旅館
讃ずるに小さかり人の天地を神が御座に足
るべきものか

夜毎月の虫と笑みます萩の戸に堪にじ薄れ
し人の名我が名
白蓮に毒ある紅をそとさしぬ戀は神業魂の
ゆらぎや

冬の夜

ちさき灯をかいたてゝ
夜の化粧の箱とれば
閨冷たうも流れよる
花のやうなる紅脂の香や。

振ひをかしき手に溶くを
微笑みまして扉の影に
『あら美し』と君が仰言

女子十九を消ゆ思ひ。

何を嫉みの木枯の
荒べるまゝに夜は更けぬ
夢ぬくもりの天地に
解くる二人の息吹哉。

夕雲

雲を生む王者と崇き巖を斜め雨過ぎて行く
大ナイヤガラ

江の月のをぼろを落ちし雁の行衛二十五絃
の一手も欲しな

聖堂の鐘に更け行く楡の村今宵小さき豫言
者生るゝ

夕雲や六十三里須磨寺の鐘の音長う秋のせ
て來ぬ

わびて立つに待人來ずの辻の宵低き雨雲鐘
あはただし

佐渡へ行く般乘り合ひの人二人信濃訛のす
ゞろ胸に泌む

登り行く鐘樓五段詩に似て撞かぬにすゞろ
山茶花散りぬ

傘を斜め君にさしかけ褄とりて片袖ぬれし
春の夜の雨

春の樓を月に眠れる京の子が紅の枕に花吹
雪する

音もなく水に落ちたる白つばきなやみや人
のまだ運命解かぬ

ちぎれとぶ夕べの雲に君をのせて戀を求む
る神醉はさばや

戀を其まゝ詩を其まゝ袖にして秋を舞はむ
の子がみだれ髪

くすし待ちて星落つる夜を扉に立てば背な
る三つの子「玉ヤー」と呼びぬ
唯三人棺守り行く影見えて草絶へし野を夕
べこがらし
ともすれば又も相見る此赤繩冷えし石にも
戀なからずや
と思へどあまりに冷えし人の情夢と知れな
の其みさとしか

乙女呼ぶ大蛇が淵の波の上に美くし犧牲の
うつし繪投げぬ
白布絹に島田の影のにじみ見ぬ人よ夕べの
とは云はせじ
匂ひの魂泣きて沈みし池のほとり湛ゆる水
に夕榮青き
冷ゑし〳〵仇し女が柔肌にふとふれませな
血なき君がみ手

かへり來て荒れし軒葉にたゞずめば風身に
しみて母は在さず
君がみ詩あまりにやさしゝかはあれど頼ま
じ醉はじわれ男こゞろ
恐ろしきミレーッの影今消にて千里の沙漠
たゞ風の聲
すぐる子が甘き生命の野の古井入りし十九
の魂迷はする

あふぎては月に泣く夜を雁とびて又俯きて
故里たもふ
紘は斷ちぬのあるをのゝき燃にん血に傳ふ
は指の小さき〳〵耻
をばしまに破れし小琴をかい抱き秋や無調
の君戀ふる曲
鍬を劒に代へて起たむの鄕の夕見よ西の空
雲驅けり行く

君がうなじに捲かむ柔手のをのゝきを紅の
たもとに小さくひめぬる
天地に只二人なる君とわが戀の運命を神を
としめな
天地を神彩らす少女なり秀才ふれては襟正
しませ
花はちりぬ星またゝきぬ春の宵無言のちぎ
り美しと見ぬ

君と寢ぬ明けぬ厨に手鍋さげて九尺の小舍
に思ふ事もあらず
堪へじ〳〵門流し行く唄聲に彼の子よく似
し三年あの夕べ
夢とそは消えぬ三年の君が戀我に一人の人
のれん姿
花に醉ふて戀のうらぶれ二十の子美はし筆
眉の夏に痩せたる

暗の夕を香なき白梅そと抱きて誰に告ぐべ
き胸なるれもひ
笑み買ふべく匂はうすき亂れがみ小櫛とる
手の何求むべき
閨にひとり誰の名よばむ力なしもだへまの
まゝ世をねむらむか
白百合の小さきに足らぬ柔肌の血なきつる
ぎに君屠るべく

薄命怨（肺病む少女）

なんぞ醜き骨掩ふと　形骸に絡む繪摸樣や
衣輕ふかの飾裝も　彩なきろれと誰か知る。

神たはぶれの鞭あげて　少女の胸をつと打てば
いたましい哉血は涸れて　吁、『薄命』の痕止めし。

春若やぎのまなざしに　都に白雲を趁ひし子の
運命の前ゐくづ折れて　傷手をなほもかき髦る。

よし、つらく共事秘めて　君あざむくに得堪へじを
「地なる花」よと慕ひます　御手を拂ひて世を泣む。

油つき行く有明燈に　面を背けて悲しめば
音なく斷れし元結の　頰に落ちかゝる亂れ髪。

男裝

已みゐむ哉世をのゝしるに此子足らじ君晩
春の酒もよからぞや
「さゐり世は」と濕める火影につと背きて意
氣に起ちし子二十一の秋
なんすれぞ磨劍の男子血にたゝぞ東亞六億
詩に眠れる
嵯峨へ辿る白梅月夜ほろ醉ひてまろび寢の
人西行に似たり

君と行く遠き南洋の島守よ二人踏むべき永
劫の天地

しばし榮て消ゆる大野の夕榮に名追ふ子よ
はき力をわびぬ

魔ともならむ神ともならん乙女の身御空に
吐かむあゝ胸の血潮

形して全かるべき人の子が胸抉ぐらむか炎
ぞもゆる

腰にとかむ三尺の秋水よしなく共詩筆一枝
萬馬を驅らむ

魔多き世に君安かれな乙女なれど小さき腕
にも征矢を射ん、怒

暗に消ゆる來ん世過ぎし世人ののぞみ秋を
誦せおのおの「魔弦吟」

自由を呼びて自由に活きむわが胸や神革命
に世に降らせな

得べくんば三年を石の像たらばや見よ口唇
に戀の炎おき
神よそはやさし少女のねぎ言と劍持つ子の
詩誦し給へ
血ぞ滴る魔の手に書かむ咀呪の詩天にかほ
見る戀なからづや
醉ふてこゝに壯士夜を舞ふ酒の欄斷琴音な
し、あゝ正氣の詩

世に逆きて路に詩說く瘦せし子の楚歌に誇
りの血は高う鳴る
わが世永刧に榮光の冠を地にすてゝ求めむ
天の其大御座
鄉を去りてかゝる峠路鐘暮れぬあゝ二十年
や檜笠の重き

細腰亂舞（慷慨の女子）

細腰亂舞二尺の脚に
波濤を蹴つて睥睨すれば
吁、胡爲乎極北の天
アライト既に紅血を見る
危機は迫れり長袖斷ちて
我れ又佩かむ『斬馬の劍』。
生きて妖妓の膝に眠るもの

死して屍を馬革につゝむと
言たり丈夫此壯語？
をかしからずや咄、此語
義憤に燃ゆる眼に眞あらば
請看よ男子あゝこの秋。

小草

北の野にしぼみて枯れし小草なりあゝ唯かくて運命を強いな
強ひまそな君東とや西ぞよき露うつくしの
百合葉を落ちぬ
夕の鐘を雨ぞ追ひ來る水一里江村今し詩に
昏れて行く
花の香に人なつかしき夕の扉や眉あげて見
る北七十里

ほろ酔の詩吟に歸る櫻月夜悲調添へては花
白う散る

一夜星の地にくだると夢に見てふと咲きい
でし秋白芙蓉

君はまさで今年も赤き柿紅葉すゞろに堪へ
ぬ我がおもひかな

媼守る辻行燈の雨に消へて鐘の音重く暗を
めぐれる

大寂に入りて太古に似たる黄昏の堂胸ひそ
やかに世をうたがひぬ

あもるべくいづく生命の宮殿ありや戀は少
女の小さき天地

有情無情花野に立たす經の人つゝむに春の
血は若き眉

神を說きて聖者あもりしベテレヘムの古堂
の壁に西詩高う見る

駿馬の骨を買ふべき人も來ぬ清女が家の槿
花ちる夕

白壁にうすう殘りし髷の形こゝに倚りては
いく日を泣きし

江を三里下る舟唄京訛りみだれは戀のあゝ
優さ男

鎭めませたぎる熱き血しづめませな冷やし
まつらむ我に注ぎませ

寂しらに悶にて春の夢は成らず血なき小枕
かつ夜の長き

橋の上を白衣たゞずむ雨の夕鬼と見て人さ
てれどろきぬ

お花今宵裝ひこちたき揚島田宮の大森盆祭
の唄よき

木の葉散りて行く人影の地に落ちてそれよ
深冬のあゝ我にさびし

君を泣きて愁ひに痩せしやせし子が鬢のほつれに世を呪はむかさすらひて三年ふりにし詩人の扉や今宵もきこゆ「離騒」の悲曲

古精舎

三百年の「春」を「夢」を
大天地に葬りて
杖立てゝ見る古精舎の
寂默いとゞ凄い哉。

誰ぞや藝術の鑿の手は？
双樹の花の浮彫を
斜にかけしさゝがにの

何を彩る糸ぞとや！

七段高き聖壇に
御衣眩ゆき紫色の
人、瞑想に額垂れて
「涅槃」を説きし跡いづく。

散るべきものと花は落ち
常なきものと人は逝く

祇園精舎の鐘朽ちて
物、活動の影色、絶にぬ。

胸に泌み入る苔の香に
背きて仰ぐ鐘楼の
断れし小縄になほ見ゆる
姿影、孤寂しき若者が！。

戀に漂零れ、世を遠み

幸福にはぐれて鐘撞きて
夕べを泣きしをもかげを
かき消さむには我れよはき。

のゝしり

詩の才は世に容れられず幸は足る笑みて天
地我が行くところ
毒の矢に色を求むる男の子刺して斯くても
悔ひぬ血を啜らむ哉
罪の子なり怒りの鞭よ呼ばせ給へ脚なる紐
を結ぶに足らじと
冷扉あけて命よと入らむおの子とや醒むる
よ立たす死の大御神

百合花に見る榮美くしき神がみ手なにソロ
モンの春にふるゝべき
自由の世にそれよ罪の子しひたげてなほぉ
ぼたんかこの伏魔殿
許しませなわれや小さき子紅の袖肩あげ糸
のまだとり敢へぬ
さだめ盡きて暗に消へ行く秀才の魂名なき
野の花そは似たらずや

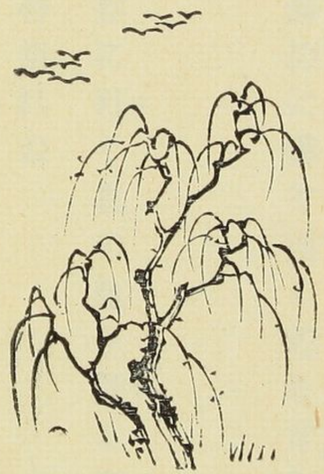
眞紅もゆる夏の威に伏す野の草のたま〳〵
似るよわれを戀ふ人に
地なる星を胸にひめむの人の子がとはに泣
くべき花か月草
毒にのらす其くちびるに眞ありや地ぉる男
の子を神こふしませ
四十年を若きに笑みぬめしひの子ぁゝ秋の
風うた聲細き

罪を悔ひて君が墓守る我ごとも知らで無情
の世と泣きますう
狂ひてはつばさ二千里空を掩ふて炎のまみ
に人おらすべく
墮ち〳〵て東亜このまゝ夢に入る血に說く
一人男子なからめや
理想捨てゝ歸りなむいざ母、います春やむか
しの故里の空

白百合を君にさゝげんに力なしそれよ菫花
の色濃きに〳〵に
酒を瓶に柔手うなじにそと捲きて醉ふては
戀の血も交るべし
とは云へど若き血は野の百合に見る抱かで
おの子何やみぬべき
注がむに價値なきもの其涙君が命とやつめ
たきむくろ

血ぞもゆる十の小指のをのゝきに君醉ひま
する罪あらざれな
君見ずや大海原に雲ぞ湧く若き廿年をわれ
劔の子
呪ひ了へて空に吐く息の血と凝る夜北斗ゆ
らぎて黑百合折れぬ
人の子によりて立つべき柔腕ゝ詩なる才に
みちひとり行かむ

ほひなる地斬馬の劔を手に持ちてをかし
からずや男子なる戀



西郷南州の像の下にて

西方に驅け行く日輪の
余韻幽かにたそがれて
人間と魔神と呼ぶ地の暗黑を
吁、崇高の君が銅像。

夜風斜に花吹けば
微笑すか偉人聲なきに

讀殘の書投げ捨て、
われ現、君と茲に見る。

問はむ英姿の不死の靈
活眼既に鎖せりや
見よ韓山の雲の色！
豫言は遂に空ならず
聞け蓋世の其壯語

我事茲に了はんぬと
笑つて去りし西海の
山河青みて又起たず。

偉業は高き丘の上へ
我れ唯知らずひれ伏せば
松籟髪に冷かに
噫、莞爾たり君が像

すゞろ

すゞろわが泣きても見たき夕べなりき人わ
すれじよ千駄が谷の秋

かたつむり鐘に時雨れて樓下る僧の背寒く
行く夕あらし

裂かばいかに血潮や燃ゆむ柔肌にふれしと
罪か野百合の白き

絶へてつゞく馬士の鄙歌靄に消ゆて江を斜
に青嵐ふく

額垂れて夕べ汀に人泣かば詩聖たらずや秋
ライン河

紅脂買ふて質屋が門にうなだれし女痩せた
る京の夜の春

女神のりて水の上行く蓮葉舟御座をかして
花ちりかゝる

一葉ふたば鐘楼斜め散る見へて繪のごとけ
ぶる夕月の寺

緋傘かざす紫衣のみ袖のたそがれて堂の階
段春雨細き

夏を九十郷を西して大岐蘇に檜笠負ひし子
あはれと見ませ

神天降りて醒めよの鞭の人の手にふれしあ
けぼの愁ひの長き

秋雨の小椽淡れて日は暮れぬ痩せてこのま
丶雲に舞はゞや

ふとさめて抱かむ人の柔肌をさびし枕にそ
と撫でゝ見る

云はじれもひ得云はじれもひ人の思細りし
肩よ見ませあの秋

血に泣きて人の玉章血に裂く夜ほろゝ散り
たる白桃の花

夕の鐘を額におぼゆる時雨道傘のたのゝき
血にれどろきぬ

媚びてあぼる白百合の露魔性深き小裾に蹴
りて路に酔いざれ

小走りに京の朝を行く人の緋絹裳裾の粋の
姿よ

せめてはと詩問ひまつるをばしまに人のま
ぶたよ涙は欲しき

刻み終へしみ像枕にそと据へて佛師一人が
長夜を語る

佛堂の雨の半日世を泣きぬ尼が追想の二十三乃春

凱旋ませし君よと抱くに夢さめて枕に細き細き西の風

燃へてなれし此血二人の神聖ふ呼ばむを天のそれと許さぬ

人間ゝらせと女神織らせし薄衣にそと掩ふ血肌ろの手ふるゝべく

秋雨にみ堂の小椽人もなく黄菊こぼれて晝静かなり

花ちらして我とはぢぬる宵戸月なにを血の子の天地妬たき

一ふしにすゞろ詩口しめり來て興にはぐるゝ夕雨小窓

神秘むる彩ある帳そと蹴りて醉はす若姫みて手とりまつる

聖を呼びて神が大皇子あもらすを下界に醉
ふ子のみ袖かつがばや
秋野行くに詩味なき姉の袖引きて見ませと
指しぬ彩もなき石
名に盲ひし秀才夕べを戸によりて鐘の行衛
にれもひをのせぬ
魂は小さき紅連に神がみ手ふれて天行くと
見る水のあけぼの

野に榮へて紡がざる花眞白ゆりまな子と神
のみ手に飾ります
夕野小さく萩を流れし笛の音や秋海原に潮
きくがごと

魔の池

雌蕊に毒を含ませて
汀にもゐし紅百合花の
色には驅ける鳥を止め
香には野を行く蝶を呼ぶ。

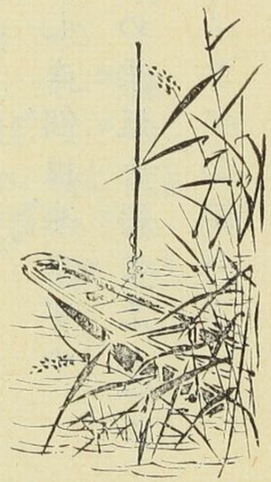
あまりに美き姿影なれば
ほの紫の夕闇を

「わさよ」浴衣の裾輕う
逍遙すゞろの池の端。

魂ゆら〳〵と手は觸れて
吁と！引く花の莖は絶へ
はらりくづれて暗の間を
なゝめに走る玉水沫。

ふたゝび淵は笑み返り

水物言はず花告げず
「秘密」ゝ深くとざゝれて
小波渡る風の叫聲，
『美はしき餌は來らずや
匂ひの柔肌を得てまし』と……



秋の聲

秋の聲を低き枕に聞く夕水のをばしま白萩
のちる

詩は無しと土をば蹴りて京をいでぬ碓氷を
北に秋三十里

夢はなほ繰りし糸車をめぐる夜を芭蕉さき
行く風のさびしき

ちりて行く遼東の野の血潮見よと紅葉まき
ふむ文に泣くかな

萩の夕を旅にうれひて君行くと小露白つゆ
ゆすりても見し

すゞろ小さく人の名呼びて花投げぬ暗のせ
て行く野のはぐれ水

西の京をいくつ春秋草の戸に戀もなき身の
詩に痩せぬる

詩笛に廻廊通ふ五位の君紅の花ちる北女御
の寮

夜毎人の笑みては溶きし京紅のかけし小皿
になくきり〳〵す

天なる星ぬかにおぼるゝ秋の宵俯して野白
合の笑まひに醉ひぬ

殘壘の百尺まばら草枯れて夕べ亡國の秋あ
ふぎ見る

あゝ逝く秋地のさびしみの胸に堪にぬ朽ち
葉抱きて燭に泣かばや

よりて佗びて今宵も泣かむ薄倖子椽の柱に
身ぞ細り行く

時雨細く仁王の像にけぶり絶へて峯の大寺
日は斜なり

里余を西へ蝶を追ひ來て日は暮れぬ詩の秋
の野みな神の領

秋の野を小草に聞きし神の聲人の子露よ唯
消へて行け

人其まゝ六戸の小村秋暮れぬお花米搗く聲
若やけき

秋雨や人のみ肩の痩せやうにうつむきがち
の京なるひと夜

いく夜よりて戀をもだにし草の戸に秋を笑
む花眞紅にもへぬ

青苔に十九の夢をこもらせて眠り給ふかを
くつきどころ

玉や散らむ風な吹きそと野に立てば消ゆる
運命と露默し行く

御欄もるゝ簫の音幽か糸のごと雨しめやか
に秋の日くれぬ

思ひあれば秋の夕べを誦經の時母逝きにし
の飛電はゆめか

鐘に刻む聖經七文字苦ふりて塔めぐる五百
年の秋

若き鐘樓守
眠げに見ゆる春の宵
登る七段鐘樓に
そと息吐きて繩とれば
大天地のさびしらを
冷たく迫る夜の氣や。

聖鐘に刻む五つ文字
その一節の「普門品」

罪業の亡びと音に誦して
更け行く丑時を高う撞く。

三年をこゝに漂浪れて
榮光なき青春の二十一
溫き血潮の胸なれば
許せ一夜の音の亂れ。

噫、行く雲に散る花に

追憶の夢を今消して
殘れる二つ眉閉ぢて
力をこめし一杵に
震ひて崇き夜の暗。

雨夜

なんとなく詩によろしき雨の夜を無興か歌
仙筆とりまさぬ

人去らせて夕べの窓によりし髪かみやくづ
れて雲七百里

灯は赤う聖前の花にゆれゆれて教説く人ル
ーテルに似たり

媼説く江戸物語ふと絶にて夜の雨しづか牡
丹くづるゝ

鐘を追ふて夕野細道夢に行くに音にはぐれて物思はしき

西の國に君さすらひの七年を藍かりにしやバビロンの水

君と行く二十萬年求めざれ夢花七日戀語らばや

火影淡き遊女が部屋の壁に高う襟正します孔夫子のみ像

夕雨におもひ得知らぬ山の宿大寂をふくみて秋の氣せまる

何すとや蝶まどひ入る小萩窓遺稿の上に片羽くづれぬ

三年夕を泣きてはよりし石の塔うすれし髷にはふきり〳〵す

蜘蛛の糸に笑みて人待つ夕の欄亂れし髪に花ちりかゝる

雨けぶる川添一里たそがれて相合傘の人うすれ行く

魔とや君が戀のゝしりさてつらきみ筆のとがと悔あらせ給へ

壁に痩する花なき秋の影になきて三年夕べを夢ふとさめぬ

笑みて人のいかなくなりし春の日や花落つる音の鐘におもりたる

君忌へばとわに安かる胸の血や名なしこの花我に似たる花

駒立てゝ黒龍の水に我れ泣けば屠りし魂か闇に聲あり

逝きし兄を人のみ胸にそれと見ぬ許せかひなの夜やうつゝなき

うたて今宵胡地の小草に風泣きて大寂に入らむの三千の靈

世を笑みて沙門逝きにし此春を精舍の軒の
花うつくしき

春の夜や窓に聲ある細き雨絶へてはせまる
あの「古宵吟」

御堂や眠げの經の音絶にて羅漢の像に春の
雨降る

ほゝ笑みて斷ちし黑髪欄に抱き眠らせませ
と雲あふぎ見る

長き〳〵夢を說く人夢追ひて佗びにけらず
や造化の大前

千曲江頭に立ちて

見よ大江の五十餘里
銀蛇の眠り靜徐にて
無象の炎収めては
濤、鞳鞳の音もなし

噫、偉かるかな曲水の
浩々の流、いつ盡きむ

其一軍掬び見て
詩人の感想極まらず

あゝ此流、曲水の
末、黄海につらなれる！
其一軍掬び見て
佳人の思想窮まらず。

聖量の詩人眉閉ぢて

地の莊嚴を思ふ時
薄命の佳人涙に俯して
身と行く水の終末想ふ。

聞け其絶叫、その怨恨
讃美と懊惱のあるところ
今、天驅ける想像の
大翼は暗を掩ひ行く。

染衣

雨雲の江の北行く夕の欄裂きて投ばや戀染衣

せまる香にふと戸をいでし若葉月夜袂引く人誰にか似たる

春や二千野に呼ぶ人の聲絶へて花みな白きユダヤの夕べ

春を追ふて流れ行く水のひとすじやはぐれて花と筧に落ちぬ

世を說きて泣かせまつるに堪えじと君涙は
慣れしこの子と知らずや

醒めまさぬ君がみ額よ虹渡すと濃紅うつし
見る新戸あけぼの

毒を秘むる夏の野神が吐く息にまひるを草
の血なくうなだるゝ

痩せし腕にをのゝくみ胸ふれませな何いと
ふべき我いけにえの身

青き〳〵小僧形好きれんつむりそれよみ袈
裟の色ふさはしき

劔を撫して壯士すぎ行く月の江偲ぶ易水の
風寒き夕

小雨ふる夕べ渡頭に鐘くれて言の葉もなく
君と別れたる

琴柱に散る花心ある春の宵君と奏づる流水
の曲

君が膝にうれしうたゝ寢の春の宵かゝる息
の香ちる花と見し
花扇に夏を舞ふ夜の水の椽そゞろ夕風君に
よろしき
散る花も狂へる蝶も夢に似て詩定まらぬ春
のゆふぐれ
空しくもわが手に褪せし君が影乙女のうら
み呪ひて秘めむ

君戀ふる宵元結のふと斷れてそゞろ狂ひの
あの亂れがみ
かへり路の小傘は重き雨の宵並みて行く人
にくしと思ひぬ
伽羅の香を鬢に小傘に匂はせて紅脂屋追ひ
行く春雨小路

秋風

天地の寂寞を傳へ來て
簷端を拂ふ物音に
長夜の夢のをどろけば
迫接る有情の秋の聲。

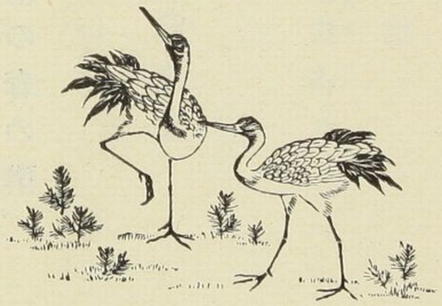
神、人間を刑罰すべく
無弦の弓につと射たる
白羽の征矢か蕭殺の

今、胸を刺す秋の風。

夕べ梧葉に狂ひては
見よ揺落の權力あり
朝、小草に咽びては
聞け聖哲の訓言あり。

淅瀝天に秋を舞ひ
落寞大地に哀を呼ぶ

其靜寂の活動に
醒めづや永刼の春の醉。



はなぐし

かの子逝きて十八年を盆祭の夕まつりても
見し京のはな櫛

胸に當てゝすゝり泣くべき君や起たぞ見ぬ
春七日花朽ちはてぬ

小さきくちにほゝともらしぬさゝゐ笑み君
がみ指の餘りに細き

水の上をそれか杜子美の魂はゆらぐ抱くに
此子詩興おぼゆる

君がたま我靈こめし詩の瓶を善魔淨土に葬
らしめよ
芙蓉髪にかざしゝ今日のなど重き嫁ぎて十
口我や人づま
逝きし母のみ針の跡を行燈に泣かむ今宵の
虫の音細き
野をひろう夕闇落ちて鐘ありて今扉あけま
す神が舞樂堂

眼りさめて院の廣庭晝しづかゆらり〳〵と
鐘撞きをへぬ
君を百合花に戀のため息そとかけて凝らば
小さき星うつしまつる
君や西に關山くれて雲行きて痩せて枯野に
さびし詩もなき
詩は胸に若き李白の月の夕斗酒のおがめを
神くだしませ

君とのみにたよらむものよ身の行衛許せし
人の春に泣かむか
み手とりて笑みて仰ぎて野に伏しぬをぼへ
ある夜の星流れぬる
下町や油のやうな春雨に男おちたき戀を語
るよ

聖壇

燃え立つ幕の緋搖れて
うちに仄めく十字架に
廻れる百合花の香も高う
靈彩仰ぐ神の堂。
白衣の袖に額皆てゝ
唯眼を閉じてひれ伏せば
神ゆ降らすパプテスマ
「悔ひよ！」の聲の胸に浸む。

あゝ静寂と端厳と
恐れ、悟り、に血は冷にて
罪悪の子今か暗面を追ふ
祈念の歌の音は低く
聖扉より投げし花束を
そと渇仰の手に受けて
はゆる灯に打ちかざし
聖壇下る春の宵。

ゆめ

欄の夕を小百合くずれて蝶舞ひぬ夢とも見
ましわが二十年
京にいく日病める枕を花ちりてうたて清怨
のゆく春の夕
百合花をめぐるちさき希望のため息にはた
ちは人の天地と見る
失せし子のミルク流して河のべに蝶の行く
方をそと見守りつ

紫の二尺の袖や壇に落ちてみ經くづれぬ宵

奥の院

小さくやみぬ鐘樓台に人は無くひゞきに
ゆらぐさゝかにの糸
才は人にかざゝむ神がときはごと止めよ名
の子の其たかぶりや
加茂の森や七つきざはし手をとりて度よ其
たび七度笑みぬ

「羽衣」を舞ひし紅欄まばら草生ひて夕べ五
百年秋の雨ふる
魂はゆらぐ夜のとばりの夢のうちに許せ前
髪みロにふれむ
江のみなみ嵐落ち行くたそがれを笛のたゆ
たひ有情の長き
君行かば北を五百里陸の果におぼせ暗の
世たゞならぬ秋

姿見に泉をいでし肌なげて百合花と呼び見
る艶なる宵や

あこがれ

詩に生れ詩に死せよの境かぢれ緑信の山碧
信の水
野の夕を天の讃美に靈呼べば晩鐘遠く雲な
がれよる
雲にのする戀よ理想よ夢のごと地にみたす
べき大いなるのぞみ
床の間の梅の香ゆらぐ春の宵書院しづかに
春の雨きく

花七日京へはしりし人の手にふれても見た
きすゞろの宵や
骨朽ちて草はむす野を將軍の墓標六尺功仰
ぎまつる
長安の南二十里雨白く千騎聲あし江渡る
夕
君を露を夕べ宿さむ白梅のしばしわが世の
春長かれな

湖添の松原三里君追ひてうなじに重きあけ
の月見る
君はまさず肩に鐘聞く夕まぐれ枯野を西に
蝶追ひて行く
血にわびて地を二百里詩魔追ふて西洛陽
の秋に泣く哉
手まくらのよべの我か夢唯にうれし重きま
るまげ奥様姿

戀にもえて百合は天なる星と見るまみにう
つすに神許しませや
糸と細く魂誘ふ聲の起り來て涙只黑し夕暮
の池
母います門の別れのたゆたひにさらばの聲
のあゝ低かりし
花も散る夕べキーツの詩誦して泣うせまつ
るによろしき春や

笠はねてかへり見すれば病む人の楯にのり
ての聲咽びくる
み額射し毒矢拔かむよ手はたゆう罪よと知
りてやまむわが願
土深く母を戀ひよる我に似るとちりし榕を
抱きて泣くよ
男戀ひてお久米沈みしくつれ井を卷くか七
卷名も知らぬ花

箱にいねし人形やなくと四つの子の寒きこ
の夜をそと抱き見る
世にそねて山ゐもり居の七年や今日も夕雲
谷いでゝ行く

ハルピンの露

（刑場の沖、横川、二氏）

『命なり笑みて瞑せずや』
額にひゞきし御聲に
つと眼をあげて見返ば
あゝ束に白雲は行く。

脚下に佇む聖僧が
白き御衣に引導の

誦文かすかに絶ゆる刹那
命なり笑みて瞑るべし。

登るは同じ十字架と
ナザレの人を胸に呼ぶ
男子三十身は死して
名は社會に生くる幸福はあれ。

胡地の大野に日は落ちぬ

瞑路は遠し「さらば冲！」
逝かむ哉夫れ微笑みて
我輩や東土の勇士なり。

襟を正して二千里の
彼方皇帝の榮幸祝がむ
右手に劔の無き子等が
斯の死の光榮を許しませ。

架上の人よ今あそ、と
誘りの色に僧去れば
晩鐘野を低う渡り來て
さすがに胸をいたましむ。

暗はむくろを包み行く
北支那の原十清里
風聲もなく地に泣きて
見よ何者か血を啜る！

うれひ

君や行く江南百里秋の夕かざして舞はむ袂
の重き

一ひらを水に任せて運命問へば底なる雲の
花掩ひ行く

經壇に僧眠りまし奥の院夕べしづかに春の
雨ふる

小さき口にうれし添乳のたゆたひを二人笑
まむのあゝ世もあれな

み手にしぼる神が呪ひの征矢落ちて小さく
もえでし野の白菫
そゞろ獨行く水の曲かなでては花ちる椽に
琴の緒斷ちぬ
許ずべく二人がふれし柔肌のもにては神の
戀掩ひます
水かくて小百合うつしてせゝらぎてつひよ
はかなの水泡たらずや

床の上によべのもだへの鬢のほつれやさし
と云ひてふれむ人もなき
なか〳〵に思ひ絶えよのみ言葉に一夜もだ
へぬ君戀ふるべく
綠そは戀の若草柔肌をぬぐいませなの絹よ
と見ませ
二人笑みて傘にさしたる君はなく破れし蕗
の葉雨細う打つ

さびしらを胸にこぼるゝ白絹に火影冷たく
人の香せまる
地を行く子若き生命のさゆらぎに花に痩せ
しの春を讃めよと
たはぶれか否運命と書きし壁に夕日淡れて
秋暮れんとす
君故にわが玉の緒の斷ゆべきを秋に悔ある
胸抱き給へ

愁人や薄日流るゝ柱より秋の聲をば聞きよ
ける哉
逢ひも得で袖かみて倚る小柱に恨みや鬢の
香も絡らみたる
夜の秋や榮華ながむる眼を閉ぢぬ風はなべ
てを吹きては人に
逝く春をめしひの母の手をとりて香のみか
たみに花たづね行く

地に墜ちて人の子の春花も見じ祈らばや今
を戀捨つる神
聖教を風がもてくる山莊や隱者ぶりては髯
撫でゝ見る

はつ秋

きらめく劔さと拔きて
わが柔胸に當つるごと
風冷やけき欄干の
夕べの色にをどろきて
今脱ぎかげし夏衣
何時！世に寄せし秋の寂影。
花あはたゞし春逝いて

夢か、夢なり青葉かげ
人と二人が手枕に
をかしと聞きし水の音
ろの水の韻物さびて
何時！世に寄せし秋の聲。

暮れ行く夏日を沈む陽に
など力なくうなだるゝ
少女よひとり草堂に

染めん咀呪の筆投げて
「秋の生命」の長かれと
祈願て見まし今宵より。

深林

虚飾を忌む詩の神が
此所を永遠なる我が領と
壯嚴の靈集め來て
太古の影の崇い哉。

人の子入らば犧牲たちむ〳〵。
神いかめしき宣言に

幹に匂ひの斧絶へて
青蔓いたずらにからみ行く。

巨人と仰ぐ松檜木
其冠首を振はせて
天飈の矢に反抗ひては
『斬蛇の劔』のひびきあり。

紅に紫莖細う

姿容を媚ぶる花もなく
立てり六尺濃緑の
草こと〳〵く雲を生む。

怪鳥さつと舞ひ立てば
暗より闇に夜は白けて
あゝ幽深の森の朝
山氣冷たく骨を刺す。

御名

にほひありと壁に額ゐて御名呼びぬ人と泣
きたる夕草堂や
おらすべく神が野を引く白き虹射てはひと
みの戀よみがへる
そと笑みてたびし聖花の色褪せぬ濃き紫の
あゝたのみなき
欄にたゝすうつくし君がみ手たゆげ紅溶か
します京のあけぼの

冷へし君が戀のむくろの影追ふて許せ血
の子の夢長う說く
人によりて名をば求むる小さき子の胸なる
琴にひゞきたてしや
み姿と其み言葉と木がらしの其夜い胸に泣
くを許しませ
さびしらを愁ひては行く旅の子の額ごしに
見る二百里の雲

其名呼びて人のみ聲を戸にきゝし十日旅の
子信濃は國よ
なきがらを浪に葬りし南洋のま北二千里靈
雲を行く
花のせて春野を急ぐたび人の笠に落ち行く
夕鐘細き
魔風あれて百鬼夜行く天地や人みな死せの
わゞ咀呪哉

神のたびし戀の美酒罪の子がかはける口に
注ぎ注がばや

せめてはの思出われになからしめよつなぎ
とむべき玉の緒ならじ

月ぼろ花みゐ朧我が身ぼろ人の世朧か
くて消ゑ行け

小さき子の大人振するまゝごとのひゝなの
膳に花ちりかゝる

思出の庚申塚によめ菜生ひぬつむにさびし
き二つの袖や

此世なりみ手にふれむは道の罪むしろ涙の
友たらせ給へ

袖かみて小説に泣きぬやれし窓男ごゝろの
われ厭はしき

水樓や浴衣小ろでの紅二尺ながれて落ちぬ
夕闇ほたる

咲きてちりて櫻流るゝせゝらぎや花のゆく
へに春のせて行く

れん堂の壁にかきたる戀語り鐘にちる花打
ちては消すよ

灯の前に笑みて立ちます御姉の姐己に似た
る夕夏の椽

起ちも見で運命の前に涙をとす骨ある人を
あはれと思ひし

舞殿

銀燭まばゆく更け渡れり
酒宴に醉ひし高樓に
君が御言に小皷の
今一打に夜は明けん。

伶人樂を奏するに
三尺長き振の袖

嬌として力なく
『榮華』一さし舞ひまつる。

有心かなれも世に媚びて
雲流れよる曉の欄
なよび姿の舞衣に
白粉溶かす手もたゆげ。

あゝ、花散りて花咲きて

大君逝きぬ人去りぬ
紅欄雨にくづれては
まばらに生ひし青草の
夢を鎖して永劫に
舞殿の春は暮れてけり。

その人

「花のやうに散らば」と涙いく條の頰をつたひし春の夜の人

言強ひて肉を戀ひしと呼ぶ子ならば石のむくろを言強ひまつれ

美くしき人のそびらに衣かけて塑像と仰ぐ夕薄月夜

あくどしき人の言葉を花やぎて容れまつるべき女と云ふや

御手もとらぬ人の血汐のつめたさの其さび
しみを忘れ給ふな
倚らば脚に蹴りて笑むべき大神の立たする
森の殿崇い哉
姉と弟あの世なればぞ斯うも呼びて力なく
握るみ手にもあるか
母に似ぬ血汐つめたき子生れなば泣いて許
さじ筆持つ人と

小さう名なくうつむく草花に涙をとすウヲ
ーズヲルスに似る人あらば
きざみても足らじの恨みひと言に罪の人よ
と唯〻泣かせてよ
もどかしやあの高潮の血に會せぬと開き給
へな胸より胸に
悪くらしの君と呼ばせていとゞしく泣かせ
て見たき春よもある哉

土を捲いてふたゝび遭はん待たせなと三年
むかしの秋に去にし人
のたまひぬ愛しますかのたはぶれを君と生
き死ぬはじめとなすと
寂交ぜて襟元吹きぬ秋風の老ひし女の吐息
のやうに
散ればとてとぼそ叩きぬ逝けばとて扉たゝ
きぬ黄鳥、櫻

花のせて春野を走る二條の水のやうなるえ
にしと知りぬ
銀杏葉や母ある里のおのごろと給びし衣に
秋はかくるゝ
胸板に流るゝ血潮拭きも見で矢面に君を追
ひ來しものを
執着は蛇のやうなる女なり見ませと來しを
うれしむ夜かな

小雨なれどみ傘や重く歸りますと偲びて泣
きし子あるを思へ
紫に明けては暮れぬ春殿の女の眉に紅梅散
りて
生れし日薄命の繩身を捲きぬ我も罪人と申
さば足れり

太平洋の春
南より湧く春潮の
時こそくれと高鳴りて
今海底を走せ行けば
水面にゆるき浪の音
唯ゆた〳〵と岸を嚙む
太平洋は春なれや。

『地よ美くしき彩あるを

天上胡ぞ寂なる』と
愁ひて裝ふ女の神の
霞と云はじ何の氣の
唯ゆら〳〵と空を這ふ
太平洋の春を見よ。

あゝ大洋のなゝに浮く
諸多の島の島守の
椰子の大葉の影にして

春の潮を聞く時は
沖行く船を呼び止めて
「彼方の大陸」と叫ばしむ。

夕べ芙蓉に落つる日を
背方に負ひし旅人が
朝蒼茫の春の海の
希望の影に憧がれては
東を遠く亞米利加の

ロッキの嶺を仰がしむ。

偉いなる哉渾圓の
あゝ、空青く水青く
いづこか春の生れ來て
春や那邊に老ひて行く
それとも分かぬ大洋の
醉へるやうなる潮の音。

《完》

ちる花

（短編小説）

誰が罪

『君ちやん、寸時掛腰おさいな』

孤寂とやうな、絹燈の淡光、主なき青蚊帳の枕を透して、火影ゆら〳〵涼椽にまで淡く、青葉若葉の葉摺の風が、胸から乳房に、――

乳房ゝら骨隨に、キト、泌み入りて、眞、夜の氣に醉ふたる心地、

磴と許り、小さな刻みの足音が止まつて、暗裡に浮動

めく人の影姿、― 妾と斯う云つて立つのであつた

『まあ、春さんでしたの、毎夕お一人で？』

手を握るやうに近ふ進つて、兩人は、肩を並べて着坐た。

『はあ、手前一人が大好なのよ、夫れもねえ無益ない事許り考へて』

『ホ、無益ない事なんて……例の作詩なんでせう』

『ホ、夫んなと、……其かはりねえ、君ちやん』

云ひさして恐愕としたが、

『頃日ね、妾、妙な事ばかり考へて居るの、それはね世の所謂クライム？「罪」と云ふとね、夫れは凡て男子の造るもので、道徳的に云ふ『罪人』とは、女性に對する男子の凡てを通じての代名詞じやないでせうか。なんて』

『ホ、……。大變に難かしいのねえ、然うして御意見は何う……？』

『意見……つて、別に有りやしなくつてよ、だからね、今夜は是非君ちやんの御考へも伺ふと思つて』

『ホ、……討論會を開かうつて云ふの』

云ひ知らぬ可笑しさを覺えて、二人は華かな笑聲を立てた。

『妾もね、そんな事を考へないでもないけど……』

と君ちやんは言葉は次いで、

『全く女子なんぞはね、元々優しい、それあ小羊の樣なの。夫れが漸々自分から魔の谷へ落ちて、身も世も忘れて、否え、忘られて了ふあんか、女子だつて悪いには違ひないんでせうけど、罪は確かよ斯く成らしめ

た男子に在るんですよねえ……』

『左うですわね、夫れが絶對に男子が悪いと云ふ譯でもないんですけど、矢張り男子がねえ……』

『にゝ、何んだか妾、男子が怖ろしいと思ふわ、それあね、本當に情に脆い、情と涙とより他には何あもない直ぐ欺かれ易い乙女の心を、誘引つて置きながら蹂躙だり玩弄だりした上が、貴女、理想に叶はないからだなんて……。妾、余りだと思ふわ、斯んな男等には本當に峻嚴な社會的制裁を與へて、充分……心

から懲らしめて遣りたいと思つてよ』

鬢の毛がハラ〳〵と、くづれて、君ちやんは屹となつた。

『本當にねえ……』

妾は急に續穂を失つて、其儘其所に俛首れて了うと、

『妾ね、斯んなとに諷刺たてのじやないんだけど、既往斯んな詩を作つた事があつてよ。毒にのらす其口びるに眞ありや地なる男の子を神おらしませ』

『ホ、……』

『ホ、……』

短かき夏の夜は更けた。

當十八の夢も既早過……

花が散つて、花が咲いて、雁は行き、雁は歸つて、春秋は三變？

其後私は、當家に嫁いで、幼い者まで養育で居る今日ふと、門を唄流して行く法界節の男女連――、其女の後影が如何にも、君ちやんに似て居るので、走りでゝ見送つて居ると、チラと顧望た赤襟の、「奈何しても君

ちやんに相違ないッ」と思つた刹那、
ア、、彼女が、聲自慢の唄の一節、
他人さ奥さんホイ……私しやに、好々よ——
松原を遠く、縫つれて、併つて、人影は既う見になく
なつた

（完）

街頭の木枯

よし子

血もなき口唇に白齒する
老女たま〳〵吐く息と
寂交ぜて吹く木枯や
都大路の夜は更けぬ。

人若うして世に拗ねて
大隱を模す小驕慢
愁ひに長き髯撫でゝ

我が默想に沈むかな。

連なる軒の明昏に
紅脂の香絡む格子戸の
中を灯による麗人
三味の音締を遠く聞く。

濁世の緣と眼を閉ぢて
力なく彈く二上りや

『葦の假寢の夢枕
身と涙速江の捨小舟

引く人なし―』と振はせて
絶ゆる悲調のいとしさに
詩、なんすれぞ、筆折れば
高鳴る風の一陣。

三筋を糧の彼あれば

筆を生命の我ならむ
『苦は人生の表現ぞ』と
端然として觀ずらく。

戰友（上）

『此品をれ食りおさい、』
垢染みた白衣、血痕まだらに、不如意げな言葉も重く、
怪しい、笑みを、浮べながら、牛酪臭い一片のパンと、
一注の油液とを、枕頭に置き去つた一人の露看護手。
後方の扉は、靜かに閉ぢられて、其足音が、一歩一歩
遠く彼方へ消えて行くと、病室は又、依然の寂寞にか
へつて、なんとも云はれぬ、一種の、鬼氣が、頭から

脚から、

一身を圍んで、蕣々とせまつて來る、

炎熱い、遼東の病舍の窓、風なき夏の夜は更けて、那邊ぞ、遠き砲彈の音に、臨終を絶叫ぶ、人の哀さ。

一人靜かに、眼をふさいだ。

昨日までも今日までも、身は一中隊の長として、掌に幾百の健兒を操つた、自分も、今日、午後よりの山河の激戰に、思はずも、胸に敵彈の破片を貫して『ア、最後ッ』と、瞑目すると、既に知らず、

夢中に收容された、此病舍。

今、寢台の上に横たはつて、敵の情に生存ふる、恨み恨みは、なか〳〵に、彈丸よりも深く、骨身に通つて劍を握つて蹴起たも幾回？

其都度出る、胸の血汐は、潮流とながれて、又蹌踉と倒れかゝる、現在の軀幹。『死苦にも勝る懊みを、抱いて、何時まで、此生耻を、つゞけんとするぞ、決然我から、食をば廢して、せめて彼等の手塩の食物に、神州男子の血潮、は製るまい。』

と斯う思ふと、わざ〳〵持つて來た、枕の食物も、どうして、最後の喉に通過そうぞ、固く〳〵双眸を閉ぢて、近く、遠く、唯一條の記臆の路を辿たのである。

四隣は人の氣息も聞えず、鎮まり返つた夜の氣はそゞろ寒く、ねられぬ病軀の腦神經はます〳〵興奮して、果ては、何んだか、有耶、無耶の境に落入つて、終うと、慕はしい故郷の山川、なつかしい戰友の俤が、幻のように、空中に現はれて、其所に影なき形を追ふ。

呀ッと叫んで眼を開く刹那!!!

過眼矢の如く、走り去つた彼女の夢姿! 胸上に組まれた、双の手は、解けて、落ちて、曉の洋燈の枕にゆら〳〵。

（中）

澄子、澄子、幽かに繰返した、

自分の故郷は総州、木更津在、一村の名譽を、双肩に擔つて、萬里の征途に上ろうとする、勇士、川嶋軍曹と、僕との爲めに、村人は擧つて盛大な宴を張つて、

二人が光榮の途出を祝つてくれた、
にも關はらず、僕と、川嶋は各自、反抗の眼を見張つて、此時までも、平素の反情を翻さうとも爲かつた、
然、今夜、此袂別の席へ、酌にと侍つた村の名花！
澄子を扣へて、最後に、言葉を迫つて見た、
すると、彼女は故意と兩人に同盃酒を進めて、
『さらば、此身は、結局、武功の多大い、一方の勇士に差上げませうよ』と、ホヽとした、
よし、僕も男子だ、！

賴みない、女の言葉を目的に、翛然鄕里を辞した、
明日！
自分は其後、各所に、轉戰して、美くしい餌をば求むる、心情の前に少なからぬ、拔群の偉功をも奏して、
少尉から、中尉、現は中隊の上官を命ぜられて、引卒ゆる一團の部下の中に、噫、此者川島が服役とは
僕は實に、渠の面姿に接する度、裂々燃ゆる、競爭の念に、時には、下卒の渠を扣へて不道の命令を加ふる事もあつたが、渠はいつも、やさしく、默從して過ぎ

た。

ろうだ、昨日、此戰が開かれる、少し以前だ、僕を敬して遠ざけて居つた渠、川嶋の擧動は一變して、馴〳〵しく上官室に、來たかと思ふと、突如自分の、脚下に、額づいて、『中尉殿ッ』と、語がはづんだ、深く〳〵何物をか、追懷するやうなふう、

『中尉殿ッ、彼女件は、既に、閣下に、讓捧げて、居りまする私、恐れおがら、同鄕の御交宜を以て、斷然、國家の爲、君主の御爲、それを光明に、生死を共

になし下さらば、下卒の喜びは、如何許りでせう……』と、云はせも果てず、自分ゝ川嶋の、双手を握つて、「軍曹」と、ばかり。

噫、漠々たる、功名の野―、否、淺間しい、功名の野に、疾驅した、僕等兩人、何とは知らず、偉大なる、靈斧に打たれて、寸時、無言に、空を仰いで居ると、同時、耳朶にする敵の來襲……、手をとり合ふて立ちあがつて、相並んで進む知死期の路。

二人打たれ、一人たふれ、かへり見れば僅、十有餘、

「君」と呼べば、「閣下ッ」と、答ふ、

迅雷、力をこめた彈が、今草群に、落ちたと、思ふと

サッと、ほとばしる、紅血、肉魂、碎けて、散つて、

軍曹やいづく、

自分は其所に控と倒れた。

（下）

夢のやうな、我身の上、……

今宵、故郷の澄さんの夢魂は、何所、誰人を辿るであろう、もし、もしもだ、此身の重傷が幸運になほつて

再び故郷のふところに、相容れられる事があつても、

あゝあの崇高い、澄さんの心に、どうして、

可哀な川嶋を措いて、自分の前に、綠の黑髮を結改も

のぞ！

解し得矣〇

澄さんが、彼の時の言葉は、單に兩人を精勵まさうと

しての、手段に出たもの、此慘憺の二人の報知が、彼

れ村人の胸を打つの時〇其村人の一員の澄さんは、き

つと、無形の川島が忠魂に對つて、無形の結婚を約す

ると共に、如何に、生存た僕身を嘲笑であろう、病苦に、心痛に、一夜を悶えた夜は明けはなれて、疲れた、頭の恍惚とすると、「にッ殘念なッ」

あゝ、隣室には、同じ非運な、戰友も居る

（完）

野の女

（牧野）

夢！と、思ふと、もう、夜が明けて居るので、急いで床を跳ね起きて見ると、毎日ながら、なつかしい、小羊の聲が聞へる、起きよと、私を促すであろう。

冷たい 曉の露を踏んで、眠げな花の香に醉ふて、小川を渡つて、丘を越へて、斯くして行く一里の郊原。

少女の職分、そう、今日も亦、二つと同所に、其所に樂しい、終日の光陰を語り盡くそうよ。

静徐、手綱をとつて、小舎を出た、
花の上吹く、なよ風に、凝りし血汐の音なく溶け行く
ような春の野、高い〳〵、蒼穹を仰いで、其儘馴れた
手枕の、私は、土にゴロリとあつた、
淙々〳〵音して、行く彼方の流水に、二つは水を求めて、
走つたのであろう、見渡す、こゝには、もう影も見え
ない、
斯くして、はるか、雲の流を眺めて、恍惚とすると、
丁度〳〵宏やかな、華やかな、天帝の樂園の、羅衣の

ような搖檻の中で、一種なつかしい、子守の謳を聞く
かのやう、
眼瞼は次第に……
美しい夢にと、入つた、白露が、ポトリ—、思はず悚
然として、眼を開けると、いつ、此所に、……二つ
は笑ましげに私の身体を廻つて居るので、
かつて、喘ぎよつた、流の水、それが今、其柔毛から
ホロリと、振はれて、落ち散つた、淨らな玉……
私はおれを、拂ふに堪えぬ、匂ひ高き菫を手折つて、

それを其儘花へと受けて、ア、春の日を三個の影此天地には云ひ知らぬ平和の氣が滿ち〳〵て居のである、私は例の、唄をうたつた、

此野邊にして永劫に
幸あるものか、羊飼
と、眉あげて見る、西の空に、美しい、夕榮の雲を排して清朗げな神の御聲、『此人の世をどうする』と、私の勉め、羊飼、人ゝ賤しと、笑ふでせうが、私の身には、是より他に職がない、でさう、それ〳〵定まつた

目的に進對つて激しい、つとめに働く人は多いが、
けれ共、美しい、優しい、崇い、而かも、いとしい、
業が他にあるでせうか、否々私の天職！羊飼、
斯業はもう、人生には、ありとも認めぬ、宏いところ
狹いところ、世界の、幾億の人等が、富貴の前に、金
錢の前に、肉体を賣つて、貞操を賣つて、そうして、
それが人生の職分、……
嗟呼、何もない、たゞ、私はあの、つとめが戀しい、
よし、現實の人間が、やさしい、口から、人の世の戀

愛を説いて、秘密を告げて、さて、「何故の理想ぞ」と問ふならば、已が行くべき生命の野、神のおの、み園を指して、徐ろに、唯もうなつかしい、唯もう、なつかしい……と、

かくて、一年、又春秋、二つと共に野に老ひて、若木の花は、散つて行く、五十の生涯！

いろんな感想を考へて、胸を抱いた、手をとつて、つと、起ちあがると、烟るやうな野の遠近、淋しい、夕べの氣が色が、悠久と迫つて來る、

袂から、とりだして、吹きでた、一管の牧笛、

余韻が嫋々野面に播はつて、二つはこゝへと、集つて來た、冷たい、夕べの露をふんで、眠げな花の香に醒めて、小川を渡つて、丘を超へて、歸つて行く、夕べの徑……

春の夜の月は朧〻

（松原）

『春さ——』

斯う呼び止めたれは、毎朝通つて行く松原の、たふれ

るような小舍の、婆さんで、何時交じつたか、萎れた
菫もこぼれて見ゆる、一束の榾を、朝寒の爐に、くべ
ながら、なんだか、そわ〳〵したような、ふり、
『春さ、好いで、ねにかよ、おら、寸時た前に、話し
てい、事があるんだ……』
『お婆さん、いつも精が出るのねへ、』
と、私は、二つを連れたまゝ、投げるように、柴戸を
くゞつた、
『若いに早い喃、感心なァ』

如何にも、うれしろうに、にお〳〵して居る、
『私しや、お婆さん、永久もおうして、……』
はつと、思つて、口を噤んだが、た婆さんの耳には、
たしかに聞えおかつた、
『た前さ、まあ、いつ迄も、そんな職して居る、存念
だかのう、當世皆無、堅氣お娘だいなァ、他人事じや
ねえや、俺りやあ、おんだか、口惜しい、ような氣が
して、なんねい、だが、春さ……お前、まあ、俺ゐ
、、、、、、とつくら胸ん中を、話して、くんねえかよ、

『……』

やがて婆さんは消にかゝつた、榾火を續ぎながら、なほも熱心な言葉をつゞける、

『春さ、知つてるだあよ、彼の松吉さあ所のれ里つ子のう、なんでも、東京の高貴た紳士に、のぞまれたとかで、朝早、此前を、婦夫で、通らつしやつたんだがよう、聞きやァ、富豪の、奥さんとかに、なるんだとかよ、』

と、老の腕に、力をこめるのであつた、

『それに、彼の、れ里さあだよ、なんでも、世の中ァ黄金だあ、金さへ、吳れりやァ、何業でもするつて、いつてたさが、とう〳〵身体あ、三百兩に賣れたァだよ、ほんに、女は花だよああ……』

云ひあがら、妾の姿を、熟々見入つたが、ふつと、思ひだしたように、

『そりやあ、れ前のようなあ、都にも、たんと、あるめいだよ、精神次第だ何所へでも嫁かれる、れ前の姿容だがのう、まう云やあ、れ前、笑ふだかも、知んね

にが、息子、花作があだよ、如何でも、れ前を、欲しいと云から、とんでもねへ、あんな美娘を……と、云つてやつたあだよ、すると、世の中あ、不如意とか此頃アもう、山へも、行くか、行かねにだよ、』思はず、老の眼にホロリと、した、

（かへり路）

朝、夕の、露を踏んで、眠げな花の香に醉ふて、小川を渡つて、丘を超へて、歸つて行く夕べの野路！ふと、彼方に、俛首て行く、花作の影が見へる、

あゝ、あの太古に似た深林の中に、獨り、靜寂を想ひにかへつて、清らな、斧を、打振る時、奈何してそんな、心が、起るのでせう？

力なき鞭をあげて、睦じげに、ならんで行く、夫婦の小羊を、夕べの路へと、追ふのである。

（完）

姉のおもゝろ

『俊さん、姉さんの胸中を……』

行く秋の寂寥を、此野、一所にかき集めたかと、うら枯れた千草がくれに、鳴き細つた、虫の聲を、ふみながら、山陰に淡るゝ落暉を追ふて、とぼ〳〵と辿る、夕野の路、悼氣な、戀にやつれた、お胸を押へておもはずも姉さんは、はら〳〵となされた、

『あら、姉さん、妾よく、存じてますわ、』

『そうねに、妾の心を察して下さるのは、俊さん一人

ばかりよ、例ひ、死んでも、俊さん、』

『姉さん、そんな心細い言を……』

と、仰ぐ、痩せ〳〵し、姉の面わ、胸は千々に、かいむしらるゝ、

『何も、好んで、出郷と云ふのじゃ、ないけど、俊さん、妾もう、堪にきれませんから、』

糸と細く、絶にたと思ふと、葬とばかり、妾の手を握つて、

『俊さん、姉さんはね、獨立してよ、異郷で、しづか

に、獨立しますわ、』

『何を、仰しやるの……、姉さん、潔さんの變心だつて、唯一時よ、』

「否、捨てられた身の、それを、復びとゝ、要求ませんのよ、却つて、其女と潔さんとの、お睦じい、御様子を、妾が此土で、お羨み申して、居るなんか、お互に罪なのよ、ほんと、もう、堪えられなくつて、……』

力もなく、

『妾の樂しい夢は、其女も樂しい夢、悲しい、感は、

其女も悲しい、想、ですから、唯もう、わ兩人の行末を、祈つて居ますわ、何卒、俊さんからもねへ、わ兩人の、御消息を、時々ねに、願ひますよ、』

『……』

『淺間しい姉さんでしたねえ、俊さん、堪忍して』

昔ながらの、やさしい手に、妾の亂れ毛を、ろつと、かきあげて下さる、

『俊さん、聖戀だおんて、妾が好い、鏡よ、能く、心を固定て、何事もねへ、お頼みしますよ、』

戀に、はぐれて、漂零た、哀れな、一人の、我が姉が其苦しみを癒すべく、異郷に行くを見送つて、あかず秋の夜道を語り合つたが、いつかもう、路は盡きて、暗に反白う、渡場の旗が。

× × × × × × × ×

『俊さん、此別が……ちよいと、わ手を』

「さよなら〳〵、丈夫でね、……」

水は流れて、影は消えて、幽かに、すゝり泣く、聲が聞える、

「妾の、心、姉さん、どうぞ、許して、」

よろ〳〵と倒れると、風なきに、汀の葦の花、をびたゞしく、ちる。

（完）

後半生

引例へば、花も草も、荒野の末に、美しい愛人と、分袖れても行くような、寂寥しい、然矣大寂寞しい、秋日の風物！無力げな落日の影が、急乎淡紅く、小椽の障子に、一日の最終の、光線を投げると、突如立ちあがつて、見るともなく、空を仰いで、尚も、文士は、沈痛に言葉を、連續られた。

「如斯な理由で、人生の罪の最極を盡した拙者、今れ話した其事が、不圖も私を新生面に誘導くの、動

機となつて、吁、恐ろしき悪魔の現化と、自覺ると幾夜の夢に、苦しんだ事がありましたか、」

と俯だれた眉宇のあたりには、愁はしき、血汐の涙が反見ゆる。

「全然眞乎、拙者は、秋水ならぬ一枝の筆に仇敵ならぬ、有情の人間を、痛傷なく、柔らかに屠つたので、其美しい、犧牲となつた青春の男女！

其希望ある形骸を捕へて、再び浮ぶなき、深瀬の底に葬つては、ひとり、三面の記事に、嬌然として居

た私の罪！實に奈何たる、最大きい罪悪でせう、ですから、拙者は、貴女の如な、世馴れぬ、可愛い—、少女の爲、否、誰もですが、限りもない、高い理想の階段に、攀登つて、半途に停止んだ人等の訓誡として、必らず自分の今日迄に於ける、蹉跎の歴史を繰返すので、決して、頼もしい其青雲志の程を許容ぬのでは、ありませぬぞ、」

夕風烈しう、文士は襟を正された。

「三年、五年、今後、貴女が東都に苦學して、一意

成功の終途に急がれようとも、婦人の身の果して能く、此社會の誘惑に、打勝つ事が出來るでせうか？

令例、研學幾年の功が成つて、君が目的の婦人新聞記者！榮光ある、王冠を手にしたとて、

恐ろしき前途の職業！

可憐むべき他人の、秘密を摘發する、……

あゝ、それを貴女は胸底に反省ませんか、「天地に生れて、自由に活きて、罪業なく墳墓に、進行で行く、」全く人生の意義は、盡くされて、居るので、何

を苦しんでか、淺間しい、虚名の前に、自ら知らざる罪を犯さうとするのです、パンを求むる計畫は、他にいくらも有る。」

「何卒、もう、了解りましたから……」

「是非、お歸郷なさい、秋高き、信山の幽境に、大自然の啓示を聞く、貴女の運命を、拙者は、羨望に堪えんのです、實に、渴仰して止まないのです。」

縷の如き文士の追想、!! 沈み行く日に得堪えぬよう。

× × × × × × × × ×

秋霜、烈日、
例ひ一大鐵槌を下したとて、容易く碎けようともしな
かつた私の理想の熱塊も、血有り、涙ある、文士が眞
情に、潤然と溶けいでゝ、再び、都門の初秋に、背き
去つた爾來、
樂境に樂快しい夢を重ねて、今年の秋も既に闌けた、
今宵天空に北碧星の煌き！
あゝ、當年の旅舍の窓に、光は彼文士が記憶を引き出
して、貴下が救濟の女の現境を、思ひ浮べて下さるで

あろうか？
成功もなければ失望もない行末は平垣な人生の行路！
斯くして私の後半生は、何事も面白く、何事も快樂し
い。　（完）

辭鄕の賦

よし子

『寂、花影に唯泣いて
唯に老ゆる』と春の夜を
灯に伏しぬ若人が
慰籍もなき漂零に
たゆたひがちに姉と呼ぶ
あゝ〳〵やさし胸なれば
力なき手に縋がらせて
詩弟と呼ぶに何んの罪科。

竹の葉婆娑と地に落ちて
土を打つ音の悲しきに
若し夫れ涙幾條の
頬を傳ひて膝に泌む
美くし人の在らばわが
妹よ、友よ、戀はましも
あまりに若き花やぎや
詩與說く女の世にあらぬ。

異性あればぞつと退けて
泪もつ眼に顧望ざれ
とゝ云へ冷た世は人は？
見づや火影の頬のやつれ
あゝ、なほ斯くて間裂いて
形なき太刀に血ぬらして
若き形骸を屠りたる
小狹き地の胸襟なりや。

涙の人を友と云ふ
裸形の女世と容れず
山紫の信をいで
南五十里、京に入る
忿怒よ、寂寥よ、悲哀よ、
たとへば斧を提げて
狂女緒琴に立ちしごと
十三絃を横に斷つ。

女詩人

（一）

『あら、小枝さん、久濶ぬに、……能く、まあ、こんな僻村へ……』

と、暖い春の光を、全身に沿びて、今迄、前栽の若菜を培つて居た優しい婦人は、其汚れた、泥土の手を、一寸傍の水溜で洗つて、立ちあがつたが、如何にも愕ろひたと云ふように、此方を見て、莞爾と笑ひながら

「本當に久らくぬへ……、然而、どうぞ」

少し許り摘みとつた、青菜を、籠のまゝ小脇に抱へて悠然に、一室の方へたち去つた、

油氣の無い、黒い髪を、小さな、伊太利卷にして、身には、見るから、質素な微塵縞の扮裝！、不麗な人の後影……

あー、是が十年既往、美しい、友禪姿に、小さな胸を聳やかして『世是榮華』を唱へた、我友、

山川春江嬢の、現在の塲遇であろうかと、云ひ知らぬ感想に打たれて、熟々と、見送つたが「まあ、神樣の

如な」と、思はず胸裡の底から、起つた、美妙な叫びは、幽かに自分の口唇から洩れた、

閑村の白晝は靜かに、雞が鳴いて、簷端の白梅が三つばかり、こぼれた、

（二）

眞乎、もう、十年になりましたのね、左樣、丁度、學校時代でござんしたか、私は實に甘い〳〵蜜の如な戀の力に醉はされた事がござんした、花と飾りたつた、身体の嬌態には、學校の往來に迄も、異性の人の、や

さしい、一瞥を求めて、

もう何事も、世の中は、戀でなくちやならぬ、愛でなくちやならぬと、言辭、行爲、まるで、戀愛で、持ちきつたよう、起思彼の時でござんしたわ、

皆さんが、小町娘、小町娘つて、呼んでくだすたのわ……、楚歌裡に教育された、私の心は、日一日と、戀の、一道に許り、傾注けて終つて、罵誹の反動は、尙も私の情火を煽つて、實、淺間しい、邪界に沈んで行くのでござんした、

間もなく私は學校を退學たのを幸ひ、かつて、燃にるような、青春い、想を互ゑ、未來は必らすと迄、契り合つた、竹川と云ふ法學生に、如何でござんせう、決然、妾の手から、結婚狀を送つたのでござんすの……すると、程なく、濃紫の菫をちらした、美しい、其人の手紙が届いて、記事には、

「自分は今迄も、戀は絶對であるなどゝ、云つた事は少なからぬ誤謬であつた、」

と、懺悔らしいような、返書、けれ共、貴女、當時の

妾の精神！如何して、さんな事に、執着い、
自分の戀の實体まで、竹川の爲に、犧牲に供する事が
出來ませう、舊の戀人は、現の路上の人、既う何等の
關係もあるまいと、溶かすような、妾の嬌姿の技倆は
竹川の友の、石山と云ふ學生に尋常あらぬ、秋波の悉
皆を送つたのでござんした、
戀に餓えた、若者の心の裡は、思はぬ、獲物でも、打
捕つた、ような、ふう、朋友の前、社會の前、優しい
友を得たのを喜んで、表面は誠に、美しい、交際を結

んで居りましたが、妾の丁度、二十一の春でござんした
染々やさしかつた、石山は、流行の女優花治と云ふ者
と、遠く、奥州へ、同道に、逃亡たと云ふ噂……
丁度、空氣の波動のように、口から耳へと、漸次擴が
つて、私の胸にまで、響いた時、!! 私は双の袖を嚙ん
だまゝ、身も世も忘れて、悲しんだのでござんした、
美しいと思つた、戀の實際に、ふれて、無慘、男子の
玩弄物とあつた、妾の、今此のような悔は、もう〳〵
遲ひので、少しも悔ゆるの効驗がございませぬ、

此のような間にも、保護とたのんだ、兩親の、淺間しい妾の墮落に、いろ〳〵、心を痛ました、結果でもざんしたか、七日違ひに、死亡られて、終つた、後は誰一人、憫然な孤子に、溫い同情の泪を、注いでくれるものも、ないくらい、寧ろ、同音に浮氣娘の因果の程は、如彼したものよと、まで、擯斥きされたのでざんした、

嗟、私は、此の時でざんす、誠、男子の戀の觀念は唯、瞬間の幻影のようなもので、決して、捕ふべく、

趁ふべきものでないと、云ふことを、感じると、同時に、自分の生涯は、全く、華やかな、人生の虚榮心から、脱れて、幽玄な、詩想の索求に、あらゆるものを捧げ盡くして、寂寞た私の、後半生を、飾らふ、と、思ひ、いつてからは、何んだか、此鄕の、ほと〳〵、厭はしいよう、矢のやうな、心の一筋は、只一人、昔の女友の住へるを頼つて、心細い、女の身の遠々、信濃の征途に上つたのでざんすの、短亭長驛、— 心あき、渠車の進行は、いよ〳〵、不運な、此身を、目的

の土地に連びまして、妾は、直ぐ、依頼とする、其友の住宅を、訪ねましたところ、

浮世は、まあと、常無きもの、……

親友はもう、此土には居りません、遠く、芭蕉の葉繁る、臺灣へと、良人と共に轉任れたそうでございます、

あゝ、妾は、湧き返る、泪の萬解を、如何に、破れ果てた、旅の衣に、絞つたでございませう——

後事を……妾は、是を、誇的にお話しするを好みません、

吁、世の中に、不孝の子、失戀の女、失敗の人は、やがては、大悟の妾でございました。

（三）

一個月許り以前、—— 誰も、味はふ、高い理想の、蹉跌に、苦悶んで、信濃なる、叔母の、閑居に、寄宿つた自分の、ゆくりなくも、今日、散策の序に、むかしの親友の、庵を叩いて、耳にした、悲慘の物語!!、果敢ない、運命の定律に、觸れて、樂しみ多い、花やかな、半生を、涙のふちに、落し入れた、薄倖な人間

は、一人此世に、此友許りではない。
女と云ふ女!! 自分は、斯う云つて、憚からぬ、
現に、此身が、其苦しみを、味はつて、居るのだが、
友が潔い、改悛の言葉に、燦然！心の底には、訓誡の
光が、ほのめくのである、
汚れた、多くの感想の中から、永久に、活た罪人は、
靜かに、人生の森羅を、ほゝ笑んで、遂には、此峻嚴
な、詩境の土に花のような、其形骸を、横たへること
であろう、

嗟、ア、、我友山川春江子は、無名の女詩人である、
夕暮、自分は再會を期して、門を辭した、
月は朧に、淡く人影を土に印象んで、泌み入るような
白梅の暗香が、斷續、後方から迫つてくる。（完）

文箱、

都門の夏、いたづらに長うして、今や、人叫び、人悶え、草萎れ、水涸るゝの時、こゝ、信山のあけくれ、蝶あらず、黄鳥あらず、暮鐘に亂るゝ、花はなきも、隈なく刷かれし空蒼の彩、觸れなば、散らん白露をこめて、それか、自然の大舞台なる、木の下影に、風柔らかう、人の子の、衣袖を流れて、胸より乳房に乳より、骨に、キト、泌み入りて、まゐと、涼氣に、醉ひの心地、！ 許し給へ、我は、異郷の風光に厭きて、擧

げて、信土の夏を讃ふるもの、禪を思ひ、詩を語るの時ならざるも、見ずや、裂々燃ゆる、萬有の現象は、能く、情熱の發現を啓示して、それよ云ふなき、小さき戀を語るの今、

左なり、かくして信山の夏、夢のごと、あはたゞし、やがては、來る、秋落寞の、天地を豫想して、九旬の綠陰を束の間のライフー、！

都門の夏、徒らに長きを佗びて、尙も炎熱に、狂へるの人、來らずや、來りて、仙境に、小さき戀愛を、語

るを、願はずや

と、思ふ、頃日をたま、〳〵、詩兄、白波子の父君、はからずも病みて、息子が歸省を、促すべく、書を、君が許わ送りしと聞く、

相見ざる、茲に一年有半、我は歸らせ給ふ、其人の其俤を、うつゝに描きて、怪しき幻を追ふ事數日！

歸りましぬ、歸りましぬ、かつて、仰ぎし、優しの影は、瞭として、我前に立てるにあらずや、神々〳〵しき眼鏡の光に、我は、君が人生の春秋、多きを偲びまつ

るを、俯し給ひし、其眸よ、さても、變りし、我姿に
愕ろきて、痩せ〳〵し肩のあたり、つまみし肩上げの
糸なしと、乞ふらくは、其み心に、問ひ給ふ莫れ、
それよ、彼の時よりは、我又、人生の春二つを、重ね
しの女、情に於て、智に於て、將、体に於て、いさゝ
か、向上の、傾向を覺えしなるを、女十六、ひたぶる
に、男の子恐ろしと思ひし身此、今こゝに、君を仰ぎ
て、語おきの人、唯に血汐めぐる、塑像ならざりしか
を疑ふ、

況してや、まち〳〵し父君が笑顔よ、我は多く、此間
の、消息を、語らずと雖も、誰か、多年漂浪の、遊子
を抱ひて、刹那、浮び來る記臆の徑路に、涙滂沱たら
ざるものあらんや、
君、病床に、侍し給ひしより、父君の病は、あやしき
迄に癒えて、「斯くては、汝に用なかりしものを」と宣
ふ、君や、まこと、編輯局裡、ペンを生命の身、さら
ば、明後日は、扨げて歸京せんと云ふ
突如來り、忽として去る、分袖の情、轉た、堪にがた

くて、黄昏、共に俱に、東北のパークに語る。

巨塔の如きアークライトの下、君は俯しては、曲江の流を望み、仰いで、宇宙の、無窮に、大息して、再又

三、おかしき、實在の人生を嘲笑し給ふ、

あゝ君、青春の血、燃ゆらん如き、胸にして、何ぞ、しかく、現實に、嫌厭して、「戀はなき身」と宣ふものぞ、知らず、君や、半生の悲劇に、泣哭して、來るべき、光明の新半生を、尚も、トライジーの渦中に、葬り去らんとするか？

青葉、若葉、幽香ひとり、暗に浮動きて、靜かに、やはく、四袖を拂ふ、君は云ふ、「春爛熳の花に笑まへより、我はむしろ、蕭々秋雨の悲哀に泣かん」と、詩人なる哉、君又、輕浮、喧噪、騷奢、の春より、逃がれて、秋蕭殺の冷氣に、咽ばんとするもの、推して知る花より、月を、紅より、白を、明より暗を、樂より哀を、尚も、哲學を思ひ、宗教を想ふの人、詩人と云はづして、何ぞや、

我や、君か詩情を學ぶなきも、そも又、興趣を、同じ

うするの子、いさゝか、ボエチカルの分子を含むと云はんか、呵々として、口を掩ふ、

談や漸く佳境に入りて、彼を叫び、是を語るたま〳〵現代の、文士、騒客に及ぶや、君又、○○無名の人士を、思ふと、

あゝ、いづくんぞ、我が意に投ずるの甚しき、君が心即ち、我胸！我が、情緒、是、君ゞ理想！

我も無名のすべてを慕ふと、相顧みて、唖然、『無名』如何に、韻のやさしきかよ、

小、弱、薄、遜、！是等の幾字は、見づや、無名の裡に含まれつ、名利なく、權勢なく、榮達なく、成功なき、是等の幾名詞は、之れや、無名に、伴ふ、やさしき聯想のそれとして、吾人の胸裡に、湧出もる、可愛低音のひゞきにあらずや、再び相かへり見て、撫然、

狂風一陣、君が杖を斜にかすめて、妾が花月の鬢を拂ふの時、善光寺の鐘聲、まさに、十杵、歸途に就く

江南、六十里！人行いて今やなし、

夢中の夢たりし三日の清興、あゝ何れの日か、これを

ば過去の物語として、それよ、南洋の橄欖の影に手を携へて、笑談するものぞ、山は人面に從ふて起り、雲い、馬頭に傍て生ず、信山の大觀に對して、君夫れ、何等の感想ありしや、我は此境に君と相見て、然り大なる詩を語りしのみ、

君よ、東綿嶺を出づれば、古人おきを愁ふる勿れ、萍水相逢ふ、是悉く、他鄕の客、相擁し、相救け、以て、幸に、健在なれ、

× × × × × × × ×

糸と細い、春雨は、今、烟るように軒を過ぎた、泣いて〳〵泣き盡くした、今日、終日—

或る悲しい、追憶の影にあやつられて、ふと、文箱から、とりいだした、此玉章、否、彼女が、草稿……

自分が、かつて、京橋の或る社に奉職して、殆んど、人生の、奮鬪的生活を、續けて、居つた頃、急に故鄕の父が、病氣との報知に、倉皇、其土に、走せ參んじた、あゝ其折……

自分は、彼女妙さんと、一夜城山の公園に行いて、相

駒の蹄

（上）

掩ひ重なつた、韓山の風雲は、一時に砲剣の響と變つて、引きもきらぬ、號外の呼聲、黄帽の往來、太平の夢は、茲に、破れて世は、一瞬に、凄じい混沌の巷と化した、此影響は、ひいて、此所、小村にまでも、及んで、朝夕、聞いた、太吾作が眠げな節も、ハタと、止めば、今日は、嚴めしい、軍服に、鍬を劔に代へて起つと云ふ有様、いやはや、這回の事は、殆んど、

たづさへて、人生を語つて見た、

落泊の僕、希望有る妙さん、浮世を辿る一筋道は、かくして、二人をいづれの、懸隔に終らしめるのであろう、と、無限の哀感に打たれた夕べ、

往昔は夢だ、今妙さんは、遠く、南米のミシシピーの河畔、紫匂ふ、十里の葡萄園！

其葡萄園の女園守……

（完）

名狀すべきでない。今朝も、此村の十余の兵士は、急に、召集令狀に接して、倉皇、立發と云ふので、停車場はもう、末明中からの、大混雜、

自分も、親しい、友達が、此群に、加はつて、同じく立つと云ふことを聞いて、其行を送るべく、プラットホームへ立つた。群集の中には、親もあろう、子もあろう、妻もあろう、友もあろう、自各、勇士が譽ある今日の門出を勵まさうとして、歡呼の聲に、待ちかまへて、居るが、年老つた、婆さんなどは、是が、生別

死別の際かのように、盡きぬ涙を、たれて居る、

何しろ、双肩、相磨すると云ふ、有樣で、構内は丁度湯釜の煮へ返へるよう、自分は到底、得堪へられぬので、人浪を、押し分け、押し分け、待合の方へ行かうとして、ふつと、傍の倚子を見ると、其所に悄然、俯だれた女がある、見馴れた、姿と、熟く見ると、愕矣。而かもそれは、隣家の、れ濱つ子なので、

いつ、又、斯んな、所に、來たのであろうと、自分は心ひそかに、此場の無事を祈つた、

折から、一隊、來着と云ふので、並んだ群集は、又一時にどよめいて、襟を正すもの、帽を脱るもの、衣摺の音、下駄の音！

再び、すさまじい、活劇も、演出されて、各自、今かと、其乗車を待つて居る、余り、來着の速いので、自分は、そつと、懐中時計を取りだして見た、

すると、發車には、未だ一時間もある、わかしいと思つて、一人、悠々と、構にこんで居ると、果して、夫れは、突飛な虚報であつたので、一同の哄笑は、暫し

場内を撼がして止まかつたが、此間に、自分は遂、お濱つ子の姿を、見失なつて終つた、

忽然！ヒツーと、けだゝましい、ものゝ叫聲……、

續ひて起る、人の罵言、ハツと思つて、其方へ走つたが、見ると、哀れ、夫れは可哀のお濱つ子、

今日、此、壯行を送らうとして、乗り捨てあつた、他人の馬を、ひそかに、自分の家へ、引いて行かうとするのを、警官は、一手に、彼女が鬢茎を握つて、荒々しい、尋問に及んで居るのである、併し一向、要領を

得ぬので、傍の自分は、知巳として、同伴すべく、命ぜられて、向ふの派出所へと行つた、

お濱つ子は、一人何事か默頭ては、時々、悲鳴の聲をあげて居る、立ち會つた、三四人の警官は、詳細に應答を促したので、自分は涙を振つて、語り出した。

（中）

彼女は今年、廿歳であるが、想ひ合ふた、夫新造が、去年、入營中、下志津大演習のあつた時、誤つて、落馬したが、一夜のうちに、恐るべき、肋膜炎とまで、

變症つて、直ぐ、東京の衛戍病院へと、入院たので、當時、彼女は、此悲しい、報告に、夢かと、許り、をどろいたが、せめて、自分の手から、水なりとも一杯と、殊勝にも、婦人の身として、其看護の任に赴いたのである、彼女が、着いてから僅か三日、思はぬ逢瀬を喜んだが、其儘……かつて、伏しなれた、彼女が膝を枕に……

刹那！女の血は狂つた、馬は、それより、彼女が胸にわすれぬ、怨恨の塊となつたので、寢ても、醒めても

夫の仇敵、其唇にのぼらぬ折とては、なかつたが、
現在も其儘、不治の狂女と、なつて終まつたので……
語り終つて、思はず、暗然とした、室は、しばし、寂
乎と聲もない、
警官は、この犯罪の、狂人の所爲に出でたのを、うな
づいて、やさしく、免赦を命じたが、尙、狂人を保護
歸宅すべく、再び自分は、重い責任を依托された、
自分は、今し、沈思に返つた、お濱つ子の傍に、懇々
と歸宅をすゝめたが、暫時此儘に置いてくれ、と、ひ

たすらに、請ふので、詮方がない、其手をとつて、室
外へと出た、
發車は僅、五分に迫まつたと、云ふので、四方は以前
に倍しての、喧噪しさ、自分は、妨害に、ならぬよう
にと、わざ〳〵路の、端へ立つた、見れば自分は、此
娘の腕を、滿身の力で握つて居る、
程なく、今迄の、あらゆる、響が、止んだと思ふと、
遠く、遠く、五六騎の、馬蹄のひゞきが戛々と聞へて
來た、自分は、此際、一層の注意を加へて行んだ、

「貴郎、少し此腕を、はなして、下さい」
訴へるように、自分を仰いで、涙ぐんだ、
腕は紫色に染んで居る、自分は、知らず、一回に其所
をゆるめた、
と、思ふと、急に、其手を振り切つて、ばた〳〵と、
一算に、驅け出したが、影はもう、人中に消えて、見
えずなつた。すると「あの畜生……」
續いて、キャッと、帛を裂く、女の叫聲！
自分は揑と、其所に倒れた、

あゝ、彼女の一念は、馬蹄のひゞきに、又、むら〳〵
と、胸を掩ふて、今驅けて來た、軍馬の前に、立ちふ
さがつたのであるが、馬は用捨なく、乙女が乳房のあ
たりを、八つ裂にして、悠々と、勇士を騎せて、停車
場へと着いた、
身は夫と同じく、馬蹄に斃れ、靈魂は同じく、天國に
召された、彼女が死屍、
明治二十七年六月九日、
吾には忘れぬ追憶の日となつて、終まつた、

× × × × × × × × × ×

十年の往昔に返つて、自分はすゞろ、當時の光景を思ひ浮べると、表を通る、荷馱馬の聲にも、彼女が臨終の悲鳴は伴はれて、冷汗の背に滿つるのをたぼゆるのである

（完）

明治參拾九年拾月五日印刷
明治參拾九年拾月廿日發行

著者　安孫子美子
發行者　東京市淺草區福井町壹丁目壹番地　前田駒吉
印刷者　長野縣長野市新田町五拾壹番地　清水龜之助
印刷所　長野縣長野市新田町五拾壹番地　清水活版所
發行所　長野縣長野市元善町參拾九番地　金華堂書店
發行所　東京市淺草區福井町壹丁目壹番地　松陽堂
發行所　東京市神田區美土代町三丁目二番地　富田文陽堂

定價參拾錢

〔不許復製〕

× × × × ×

第四部第一
1641